2020年度海洋教育実施状況報告書

糸満市立高嶺中学校

１．実施概要

（１）活動名　　糸満のくらしを支えた海について調べよう

（２）実施単元

単元名	学年	教科
1. 報得川と南山の発展の関係を見つけよう	１年	総合
2. 海から川をさかのぼって積み荷を運ぶための工夫を考えよう	１年	総合
3. 大度海岸の環境調査から海洋の課題を考えよう	２年	総合
4. 塩づくり・海ブドウ栽培から、糸満の海産物の将来を考えよう	２年	総合
5. 糸満の漁業の歴史を理解しよう　糸満海人工房	３年	総合

（３）取り組みの概要

今年度は、コロナ感染拡大防止のため体験活動に制限があり当初の計画通りに進める事が出来なかったが、実施時期を調整し、各教科との関連を図りながら取り組む事が出来た。昨年度、体験学習にとどまった反省を踏まえ、探究につなげられるよう工夫を行った。

【１学年】

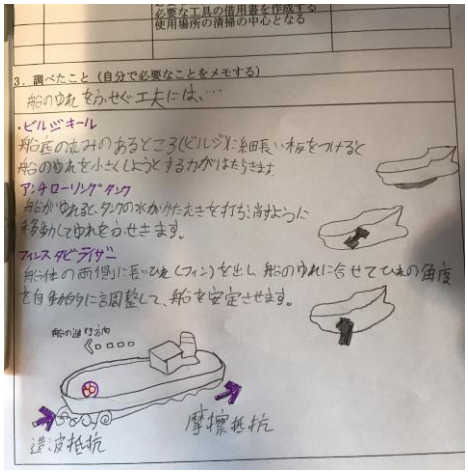
１学年では、南山の発展と海洋の関連というテーマで学習内容を設定し、南山と明の貿易で報得川がどのように機能したかという視点で、現在の報得川の（環境調査を含めた）状況や、貿易船、南山から送られた海産物などの探究活動を設定した。

南山城のフィールドワーク実施後、報得川の調査を行う予定あったが、コロナ感染拡大防止のよる生徒の活動に制限もあったため、学習の内容と時期を調整した。

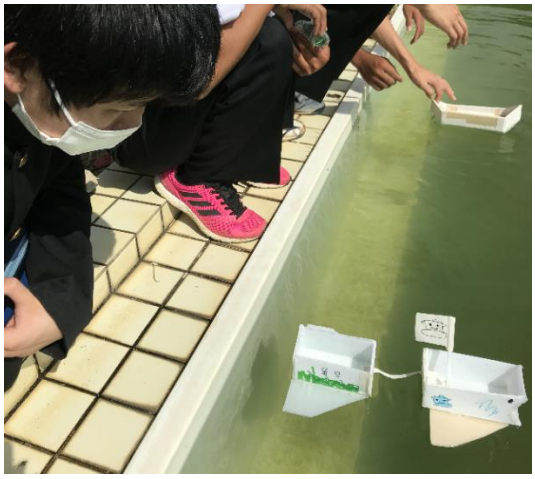
河川での活動が出来なかったため「大量の荷をどのように運び入れるか」について注目し、技術科と連携した舟づくりを実施した。

南山城跡の調査・学習会

南山城跡の調査で南山の発展を考える



安定した舟の設計ワークシート



製作した舟の浮力実験

【２学年】

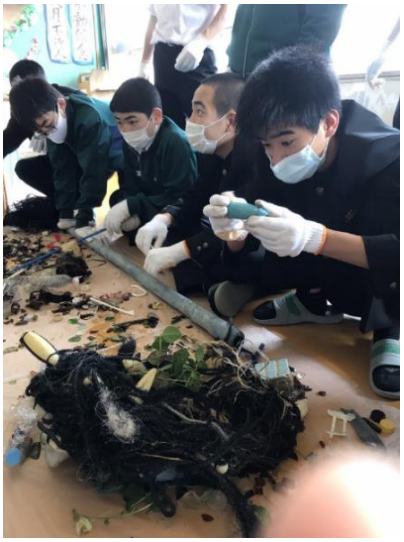
２学年は、大度海岸の環境と生物調査、海産物（海ブドウと塩）について調査し、SDGｓと関連させてこれからの糸満の海の可能性を探る活動に取り組んだ。環境調査では、砂浜に打ち上げられたごみの分類から、プラスティックごみについて注目し、ごみが漂着する理由について、海流、産業、漁業など様々な視点で課題を捉えることが出来た。

環境調査ではシャコガイやサンゴなどの現状を把握して、保全の取り組みについて考えることが出来た。

海水から塩を取り出す体験や、海ブドウ収穫体験も含めて、環境の保全と海を利用した産業について糸満の海の可能性を考えていくテーマとして今後継続して取り組んでいきたい。

シャコガイの稚貝

海岸の生き物調査を行う様子



漂流物を仕分けして、どのようなものがどこからきているかを考える様子

海水から塩を取り出す様子

養殖された海ブドウを収穫する様子

【３学年】

３学年では、持続可能な糸満の海の利用をテーマに、糸満の漁業に焦点を当て計画を立てた。

糸満海人工房で漁具や漁法、昔の糸満の様子などを学習した後、糸満で揚がる魚の種類と海産物を使った料理を調査しこれからの糸満の漁業のあり方を考える予定であったが、コロナ感染防止により、漁業の調査について調整が必要となった。

そこで３学年では古民家を調べて、漁業で栄えた糸満のくらしについて考えさせる学習に取り組んだ。

漁業を中心とした昔のくらしを聞く様子

漁民が浜で寝泊まりをする際の道具入れ

水揚げされた魚を入れて運ぶ様子

伝統的なサバニの模型

【令和２年度の成果と課題】

前年度の反省であった「深い学びにつなげる工夫」について全体計画で学年ごとに、探究テーマを作成し、授業のプランシートやワークシートを作成することが出来た。また、教師間で共通理解を図って実施する事ができた。

コロナの影響で日程や内容の調整が必要であった事から、次年度はオンラインを活用した調査や、地域と海洋の繋がりについて視点を絞って取り組んでいきたい。また、SDGｓを取り入れて未来をどのように生きていくかなどの探究を目指していける取り組みとしたい。

２．自己評価

（１）妥当性

①テーマと目標設定について

学年ごとに探究テーマを設定して取組む事が出来た。１学年は地域の発展に海洋がどう関係したかという視点でテーマを設定し、２学年は、環境の視点と海を活かした生産についてテーマに設定した。３学年は糸満の漁業と未来について考えるというテーマ設定で取り組んだ。

今後も１学年「地域と海洋」→２学年「環境と生産」→３学年「糸満の未来を考える」という学習を継続して取組みたい。

②学習内容の分量（無理のない計画であったか）について

総合的な学習の時間と学級活動の時間、各教科の横断的な関連が整いつつある。テーマ設定や取組みは無理なく、調整して実施できた。

③内容は適切であったかについて

今年度は感染防止対策のため、３学年の体験活動が不十分な取り組みになったが、内容は各学年に応じて計画しており、今後も継続していきたい。

（２）有効性

①計画通りに実施されたかについて

当初の実施計画通りにいかなかったが、外部機関と連携して実施することが出来た。今後の実施にあたってもしっかりと連携して取り組んでいきたい。

（３）効率性

①学習の実施時期は適切であったかについて

天候の状況や外部機関などとの日程調整、感染防止のために、各学年の当初の計画とは、ずれがあったが、教科や総合的な学習の時間の年間計画を調整しながら進める事が出来た。

（４）持続性

①学習内容や成果が適切に活用される見込みがあるかについて

３年間の取り組みについて、実施計画案やプランシート・ワークシート・写真などを記録しており今後の資料に役立てながら、新たに改良して取組む事が出来ると思われる。

②学習した内容を継続・応用する仕組みは考慮されているかについて

学年ごとのテーマ設定が整ってきているため、継続して取組めるようになっている。今後は体験や学習内容を踏まえて、探究型の取り組みにしていきたい。また、小学校と連携して９年間のカリキュラムを設定し、継続して取組みたいと考えている。

（５）信頼性

①実施にあたり、充分な体制が整えられましたか（教員間の連携・安全対策など）

年度当初に、これまでの海洋教育の取組みや海洋教育のねらい、今年度の年間計画と各学年のテーマについて共通確認することが出来た。また、実施要項の読み合わせや事前学習などに取り組む事が出来た。今年度は特に感染防止対策について共通確認を行うことが出来た。

（６）成果

①期待した成果は得られたかについて

各学年ともテーマに沿った体験学習を行う事が出来たが、探究する段階までには不十分であった。

海洋汚染の現状や糸満の漁業にあり方についてSDGｓと関連づけて捉え、考える場面設定など今後更に探究する取り組みにしていきたい。

②学習目標と本活動の関連性は明確であったかについて

総合的な学習と教科（理科・社会・技術など）と横断的に取組む事が出来た。

③活動は児童生徒の海洋への関心を高める機会となったかについて

海洋教育の内容を新聞投稿したり、海洋に関する新聞記事に目を通すなど関心の高まりが見られる。特にSDGｓと関連した海洋汚染や環境保全について興味関心が高くなっている。

３．学校関係者評価について